

戦後第一世代の日本の心理学：映像資料による検討

著者	吉村 浩一
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	62
ページ	73-94
発行年	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/6768

戦後第一世代の日本の心理学

— 映像資料による検討 —

吉 村 浩 一

1 はじめに：戦後第一世代とは

元良勇次郎以来、連綿と続いてきたわが国の心理学研究の歴史を、どのように区分するのが適切だろう。その判断は容易でないが、歴史の理解にメリハリをつけるという意味で、わが国の心理学研究を担ってきた世代をいくつかに分けておくことは有効であろう。まず、第二次世界大戦までの戦前期を大きく2つの世代に分けることを提案したい。1889年、元良勇次郎が東京帝国大学で「精神物理学」の講義を始め、7歳年下の松本亦太郎が高等師範学校（東京）、京都帝国大学の心理学実験室を創設し、在任中に急逝した元良の後任として東京帝国大学教授を定年まで務めた。彼ら2人の世代を第一世代としたい。続く第二世代は、定年退官後の松本を会長に推し日本心理学会を創設した、元良・松本の弟子たちの世代である。それは、昭和とともに始まる時期であった（学会設立に先立ち、機関誌『心理学研究』もこの時期に創刊された）。この世代は、全国の帝国大学や旧制高校での心理学実験室の開設、また大学令（1918年）の発布をうけて私立大学の心理学研究室の創設を担った世代である。いわば、心理学研究室の全国への拡大時期を担った世代である。法政大学でも比較的早く、心理学の教育・研究が開始された。1921年に高橋譲（ゆたか）が倫理学教員とし

て赴任し、1924年には高橋の後任として城戸幡太郎（きどまんとろう）が着任し、特徴ある心理学教育と研究活動を展開した。城戸は、戦前の第二世代が担った日本心理学会の設立や『心理学研究』の創刊にも中心的な役割を果たした（吉村, 2004 参照）。やがて第二次世界大戦が始まり、終戦からの復興によって第二世代は、終戦後の世代へと橋渡しすることになった。

終戦の混乱期を脱して第三世代、すなわち戦後の第一世代が活動を開始することになる。戦後第一世代は、戦前、戦中に高等教育を受け、戦後になって新制大学で教鞭を執り始めた世代である。まもなく還暦を迎える筆者にとっては恩師にあたる世代である。そのため、歴史上の人物に対するものとは違う親しみがあがり、今なおご存命の先生も少なくないことから、本論では敬称を付けて記述していきたい。今日、80歳代か90歳代の先生方で、さすがに現役教員からは退かれています。

戦後の第一世代を特徴づける歴史的出来事があった。それは、1952年の夏、1ヶ月近くにもわたって行われた「京都実験心理学セミナー」である。米国ロックフェラー財団の資金援助で開催されたものだが、心理学に関するこのセミナー以外に、政治科学、アメリカ文学、教育学、経済学のプログラムがあった（溝口, 2006 参照）。こうした諸プログラムの中であって、心理学全般ではなく

本稿は、立教大学長田佳久教授を代表者とする科学研究費「心理学の古典的実験機器に関するデータベース作成とその活用」（基盤研究B）の補助を受けて実施された。代表者をはじめメンバーの先生方からご示唆を受けたことに感謝します。特に、科研メンバーの一人でもあり、現代心理学第3部「メンタル・モデル」で製作指導された西川泰夫先生からシリーズ全般に関する資料をご提供いただいたことに感謝します。

「実験心理学」のセミナーであった点に特徴がある。講師として招聘されたのは、当時 46 歳のコロンビア大学・グレアム (Graham, C.H.) 教授であった。視覚の生理心理学的研究から視知覚に関わる領域の専門家で、1 ヶ月に及ぶセミナーの講義や討論の内容もその領域が中心となった。開催地の関係から関西の参加者が多かったが、名簿に記載されている 24 名の正規参加者の中には、印東太郎・小川隆・田中良久・東洋・大山正・安倍北夫など東京などからの参加者も少なくなかった。今日では知る人も少ないセミナーだが、『日本心理学会 75 年史』(日本心理学会 75 周年史編集委員会編, 2002) には、参加者の集合写真とともに、歴史的事実として記録に残されている。また、西川 (2005, 2010) の日本の心理学史に関する記述の中に、より踏み込んだ解説があり、それらを通してセミナーの概要を知ることができる。このセミナーの参加者の世代こそ、本稿で取り上げる戦後第一世代である。良きにしろ悪きにしろ(歴史的評価は時期尚早)、戦後日本の心理学は、“生理学に基礎を置く知覚を中心とする実験心理学”が、アメリカからの学術潮流をいち早く研究者集団として受けとめたのである。セミナー参加者の中には、自らの問題意識を踏まえ、のちに知覚や実験心理学以外の領域の発展に尽くされた先生方もおられる。しかし、戦後第一世代の心理学者が、このセミナーのイニシエーションを学術集団として受け研究・教育のキャリアをスタートさせたという事実は、歴史的に特筆しておくべきことである。

2 文映教育映画社 16mm 映画の心理学シリーズ

話は変わるが、1970 年代を中心に、文映教育映画社が、大学教育用フィルム・ライブラリー制作委員会の企画のもと、大学での心理学教育のために相当数の 16mm 映画を製作した。文映教育映画社はその後社名を変え、製作された映画は、アポロン音楽工業によりビデオテープ化し発売された。その後、販売元のアポロン音楽工業も、社名を

「アポロン」(1990 年)、「バンダイ・ミュージックエンタテインメント」(1997 年)と変え、16mm 映画作品はビデオ版でも販売されなくなった。

1970 年代という時代、大学における心理学教育は、専門課程での少人数教育以外に、1, 2 年生を対象とする教養教育も展開されていた。高校までの教科にはない学生たちにとって魅力ある科目だったためか、教養課程の「心理学」は大教室で講義されることが多かった。おそらく、そのような授業形態での利用を見込んでのことと想像できるが、製作された 16mm 映画「心理学シリーズ」は親しみやすい画面作りの作品が多かった。筆者自身、1970 年代に学生として大学で心理学教育を受けた者の一人だが、教養課程の「心理学」の授業で幾本かの 16mm 映画を視聴した記憶がある。その一方で、3, 4 年の専門課程では、授業で 16mm 映画を見ることはなかったように記憶している。さすがに、製作されてから 3, 40 年が経過しており、文映教育映画社の「心理学シリーズ」16mm 映画の価値を、今日主張することには無理がある。本稿において、すでに過去の教材となったものに再び光を当てようとする意図は、戦後第一世代を担った先生方の最盛期の研究・教育の姿を映像資料としてデータベース化したいためである。いわば、心理学の歴史的資料としての価値を見出したいのである。

ところで、文映教育映画社の 16mm 映画「心理学シリーズ」の全貌を捉えることは、思いのほか難しい。会社自体が当時の経営形態を変えていること、メディアとして 16mm 映画は現在ではまず使われなくなったこと、さらには製作・販売がインターネット普及以前だったため、ネット検索での情報収集ができないなどの理由からである。試しに、「文映教育映画社」をキーワードにネット検索しても、「心理学シリーズ」に関してはヒットしない。幸い、文映教育映画社が 16mm 映画として製作した作品のほとんどは、のちにアポロンビデオライブラリーとして VHS ビデオ版に変換された。このビデオライブラリーなら、現在でも検索可能である。NACSIS Webcat および放送大学図

書館の蔵書検索で、「文映」でヒットした作品をシリーズごとに整理し、表1にまとめた（その後、現代心理学第3部「メンタル・モデル」で製作指導された西川泰夫先生からシリーズ全般についての資料を提供していただくことができ、情報の補強・修正をし、表1に反映させた）。

作品映像には製作年が標記されていないため、シリーズの製作年・製作順序の詳細は分からない。しかし、作風およびモノクロ映像であることから、表1の前半に掲げた「一般心理学編第1部」が最も初期のシリーズと推定できる。おそらく、1970年前後だったと推測できる。この部の監修者である岡野恒也先生の所属が「明星大学」と表記されているため、1972年より前に製作されていたはずである（岡野先生の明星大学在職期間は、1967年から1972年まで）。同じくモノクロ作品が中心の「発達心理学編—幼児期—」で製作監修者として関わった岡野恒也先生の所属が静岡大学教授とされていることから、「発達心理学編—幼児期—」は、岡野先生が明星大学から静岡大学に転出されてからのシリーズと考えられる。

繰り返すが、表1のリストは、ビデオ教材として存在する作品群であり、表1のすべてが、もともと16mm映画として製作されたわけではない。幸い、法政大学文学部心理学科は、文映教育映画社の16mm映画「心理学シリーズ」をほぼ全巻保有している。保有状況を、表1の最右欄に記した。「発達心理学編—幼児期—」13巻（うち通番8は保有せず）、「発達心理学編—児童期—」13巻（うち通番17は保有せず）、「一般心理学編 第1部」13巻（うち通番37は保有せず）、「一般心理学編 第2部」13巻、「一般心理学編 第3部」13巻、「現代心理学編 第1部」13巻、「現代心理学編 第2部」11巻の、合計89巻を保有している。それ以降のシリーズは、最初からVHSビデオ版として製作されたものと考えられる。

16mm映画「心理学シリーズ」には、一般心理学だけでなく、発達心理学のシリーズも含まれている。しかし本稿では、「一般心理学編第1部、第2部、第3部」「現代心理学編第1部と第2部」の

一般心理学関連のシリーズに限定して検討を行う。その理由は、本稿の目的が、「京都実験心理学セミナー」に参加された先生方を中心とする戦後第一世代の心理学研究の具体的姿、すなわち解説者（指導）として登場される先生方の姿、稼働している実験装置、それに実験のデモンストレーション映像に焦点を当てたいためである。今日の心理学で用いる機器は、1970年代当時に比べると、パーソナル・コンピュータへの依存度が圧倒的に高い。16mm映画「心理学シリーズ」には、コンピュータ化される以前の心理学実験の様子が記録されている。それらを素材映像としてデータベース化することによって、「コンピュータでできることしかやらない」という今日の心理学研究の風潮を見つめ直す視点を提供したい。

対象となるシリーズの製作年は、1970年頃から1985年あたりまで、およそ15年間にわたっている。したがって、戦後第一世代を担われた先生方のみではなく、その後の世代の先生方も「指導」として参加されている。それでも、「京都実験心理学セミナー」に正規メンバーとして参加した先生方が「指導」された作品も多い。当然、解説者として映像にも登場される。具体的には、東洋（東京大学教授）、梅本堯夫（京都大学教授）、印東太郎（慶應義塾大学教授）、松山義則（同志社大学教授）、大山正（千葉大学教授）、荳阪良二（名古屋大学教授）、三隅二不二（大阪大学教授）、安倍北夫（東京外国語大学教授）の諸先生方である（所属と職位は映画製作時のもの）。こうして並べると、読みにくいお名前前の先生方が多い。三隅先生に至っては、「じゅうじ」と「じふじ」という2つの読み方をおもちである。余談はさておき、現在の学生の皆さんに、おのおの20分前後の、いかにも時代がかったこれらの16mm映画を授業で丸ごと視聴してもらっても、退屈でつまらないとの印象しか与えないだろう。しかし、トピックごとに映像を切り出し、系統立てて整理すれば、戦後第一世代の研究者自身による解説、当時の研究で使われていた実験機器や用具、当時盛んだった研究テーマの実験のやり方を知ることのできる、第一

級の歴史資料として生き返るはずである。

3 データベースの作成

作業は、まず対象映像作品をすべて視聴し、データベースのコンテンツとなる映像素材を抜き出すことから始めた。抜き出し作業は、次の3つのカテゴリーを念頭に行った。

- (1) 「指導」というクレジット・タイトルで製作に参加した先生方がカメラの前に登場しテーマ解説を行っている映像
- (2) 扱われる実験などで使用する装置や用具を映し出す映像
- (3) 当時の実験や各種の心理検査のデモンストレーション映像

の3種類である。これらを順に、「人物編」「装置・用具編」「実験・検査デモンストレーション編」としてリスト化する。本節では、これら3つのカテゴリーの作成方針とリスト概要を、順に解説していく。ただし、いずれのカテゴリーにおいても、当時の研究あるいは研究者のバランスのとれた網羅的リストにはなっておらず、あくまで「心理学シリーズ」に登場する素材という制約がある点を断っておかなければならない。

3.1 人物編

初期のモノクロ映画であった「一般心理学編第1部」(13巻)ではまだ採用されていなかったが、「一般心理学編第2部」(13巻)以降は、「指導」の先生が最初に登場し、テーマ概要を説明するというスタイルが一般的となった。時間にして1分前後のものが多く、残念ながら、「指導」の先生がカメラの前に登場されない作品もいくつかある。「初期行動」の浅見千鶴子先生(お茶の水女子大学教授)、「知覚の成立」の金子隆芳先生(筑波大学教授)、「行動療法」の原野広太郎先生(東京教育大学助教授)、「開眼手術:初めて見る世界」の鳥居修晃先生(東京大学教授)は、テーマ解説者としては登場されない。また、複数の先生が「指導」に当たられた作品では、クレジット・タイトルで

2番目以降にあげられた先生は、解説者としては登場しない。解説者としては登場しないが、実験者や検査者役として「指導」の先生の姿が明瞭に記録されているものもある。それらは「人物編」ないし「実験・検査デモンストレーション編」に組み入れるようにした。

「人物編」の番外編として、実験のデモンストレーションなどの被験者役や実験者役として登場する当時の学部生・大学院生に注目することもできる。その人たちは、現在では50代、60代になり、中にはさまざまな大学の心理学研究室で年長の教員となっている人も少なくない。もちろん、その全体像を筆者一人の力で把握することはできない。ここでは、1作品に関するエピソードを披露するにとどめたい。筆者が修士課程の院生として所属していた京都大学教育学部において、梅本堯夫先生が「思考のメカニズム」を「指導」された。1976年頃のことだったと思う。作品中、思考に関するいくつかの実験デモンストレーションが行われているが、吉川左紀子・桑原知子現京都大学教授など、その後、さまざまな大学で教員となっている何人もの院生たちが出演していた。筆者自身、あまりにちょい役だったので記憶が薄れていたが、脳波実験の被験者として登場していたことを、このたび視聴して確認できた。筆者と同時代の心理学教員なら、シリーズ中に自身の出身校にまつわる身近な一編を見いだす人も多いはずである。今日の学生の皆さんにとっては、自分の先生の学生・院生時代の映像、あるいは自分の先生のさらに先生世代の姿を見ることによって、心理学研究の流れを身近なものに体感できるのではないだろうか。

もちろん、番外編は本稿ではリスト化しない。「指導」の先生がテーマ解説を行っている映像を中心に、戦後第一世代の先生方の映像をリスト化した。三隅二不二先生がご自身のPM理論を解説されている映像、印東太郎先生が記憶の最先端の研究スタイルとしてコンピュータ・シミュレーションを主張されている映像、ゲーム理論について熱く語られる戸田正直先生の姿と、1970年代の日本

表1 文映教育映画社の「心理学シリーズ」の一覧
(本稿の対象外のシリーズはグレー表示した。ビデオ版のみしか作られなかったものも含めた)

通番	集番	指導	タイトル	備考
発達心理学編—幼児期— 監修 山下俊郎 製作顧問 岡野恒也				
1	1	島田俊秀 (鹿児島大学教育学部)	運動機能の発達	●モノクロ
2	2	丹羽淑子 (東洋英和女学院・短期大学)	認知の発達	●モノクロ
3	3	飯島婦佐子 (明星大学)	思考の発達	●モノクロ
4	4	村石昭三 (国立国語研究所)・高木和子 (東京成徳短期大学)	言語の発達	●モノクロ
5	5	岡宏子 (聖心女子大学)	幼児の絵	●
6	6	黒田実郎 (聖和女子大学)	情緒の発達	●モノクロ
7	7	大内茂男 (東京教育大学文学部)・中地万里子 (東京家政大学・児童文化)	興味の発達	●
8	8	田中熊次郎 (女子聖学院短大)	社会性の発達	モノクロ
9	9	日名子太郎 (玉川大学)	幼児の遊び	●モノクロ
10	10	三浦武 (東京都立大学)	家族関係	●モノクロ
11	11	西本脩 (大阪樟蔭女子大学)	基本的習慣	●モノクロ
12	12	浅見千鶴子 (お茶の水女子大学)	人格の発達	●モノクロ
13	13	橘英弥 (和歌山大学)	情緒障害	●モノクロ

備考欄に●が付いている作品は、法政大学文学部心理学科で、16mm 映画版を保有している。「モノクロ」と表示されているもの以外はカラー作品。(以下同様)

発達心理学編—児童期— 監修 山下俊郎・依田新・高野清純				
14	1	島田俊秀 (鹿児島大学教授)	身体・運動の発達	●
15	2	藤永保 (御茶ノ水女子大学教授)・内田伸子 (御茶ノ水女子大学講師)	言語表現の発達	●
16	3	杉原一昭 (筑波大学助教授)	教授・学習のプロセス	●
17	4	福沢周亮 (筑波大学)	読みのプロセス	
18	5	内山喜久雄 (筑波大学教授)・田上不二夫 (筑波大学講師)	行動問題の診断と治療	●
19	6	林保 (京都教育大学教授)	達成動機	●
20	7	高野清純 (筑波大学教授)・小林幸子 (東京教育大学)	内発的動機づけ	●
21	8	依田明 (横浜国立大学教授)	社会化の過程—社会的学習理論—	●
22	9	大橋正夫 (名古屋大学教授)・斉藤浩子 (都立立川短期大学助教授)	遊びとけんか	●
23	10	鈴木正義 (北海道教育大学教授)	集団活動とリーダーシップ	●
24	11	古沢頼雄 (日本女子大学教授)	道徳性の発達	●
25	12	穂山貞登 (東京工業大学教授)	知能と創造性	●
26	13	肥田野直 (東京大学教授)・大村彰道 (東京工業大学助教授)	個人差	●

通番	集番	指導	タイトル	備考
一般心理学編 第 1 部 監修 岡野恒也				
27	1	加藤義明 (横浜市立大学)	知覚	●モノクロ
28	2	藤田統 (東京教育大学)・牧野順四郎 (東京教育大学)	動物の学習—ネズミ—	●モノクロ
29	3	加藤義明 (横浜市立大学)	性格	●モノクロ
30	4	岡野恒也 (明星大学)	知能—チンパンジーの知恵テスト—	●モノクロ
31	5	中村恵一 (一橋大学)	感情	●モノクロ
32	6	大野清志 (東京教育大学教育相談研究所)	催眠	●モノクロ
33	7	岡野恒也 (明星大学)・糸魚川直祐 (大阪大学)	ニホンザルの行動—野外の研究—	●
34	8	坂元昂 (東京教育大学教育心理学教室)・永野重史 (国立教育研究所)	思考の働き	●モノクロ
35	9	河井芳文 (東京学芸大学)・松野豊 (東京学芸大学)	精神発達	●モノクロ
36	10	岡田幸夫 (神戸大学精神医学教室)・花田雅徳 (兵庫県立子ども病院精神科)・後藤毅 (松下病院小児保険部)・大植正俊・橘英弥 (枚方療育園)	行動の異常—その診断と治療—	●モノクロ
37	11	島田一男 (聖心女子大学)	社会的行動	
38	12	大阪大学文学部心理学研究所・大阪大学医学部第二生理学教室	心と体—生理的心理学—	●モノクロ
39	13	藤原喜悦 (東京学芸大学)・福島脩美 (東京学芸大学)・斉藤耕二 (東京学芸大学)	心理測定	●モノクロ

一般心理学編 第 2 部 監修 東洋・金子隆芳・原野広太郎				
45	1	三宅和夫 (北海道大学教授)	行動観察法	●
48	2	岩原信九郎 (東京教育大学教授)・岩崎庸男 (筑波大学助教授)	心理と生理	●
49	3	新浜邦夫 (関西学院大学教授)	条件づけ	●
47	4	浅見千鶴子 (お茶の水女子大学教授)	初期行動	●
51	5	金子隆芳 (筑波大学教授)	知覚の成立	●
41	6	吉田俊郎 (慶應義塾大学教授)・鷺見成正 (慶應義塾大学助教授)	運動の知覚	●
44	7	印東太郎 (慶應義塾大学教授)	記憶の実験	●
43	8	梅本堯夫 (京都大学教授)・清水御代明 (奈良女子大学助教授)	概念学習と問題解決	●
40	9	東洋 (東京大学教授)・吉田章宏 (東京大学助教授)	イメージと言語	●
52	10	松山義則 (同志社大学教授)・浜治世 (同志社大学教授)	フラストレーション	●
50	11	原岡一馬 (佐賀大学教授)	態度の変容	●
46	12	原野広太郎 (東京教育大学助教授)・田上不二夫 (東京教育大学)	行動療法	●
42	13	国分康孝 (多摩美術大学助教授)	カウンセリング	●

一般心理学編第 2 部では、図書館検索と文映カタログとで集番が異なっていた。通番は図書館検索での番号順とした。集番、すなわちこの表での掲載順は文映カタログに従った。

通番	集番	指導	タイトル	備考
一般心理学編 第3部 監修 肥田野直				
56	1	芋阪良二 (名古屋大学教授)	環境の心理	●
55	2	大山正 (千葉大学教授)	感覚と知覚	●
57	3	藤田統 (筑波大学教授)・牧野順四郎 (筑波大学助教授)	学習成立の条件	●
53	4	金子秀彬 (国士舘大学教授)・正田亘 (立教大学教授)	オーガニゼーション	●
64	5	松山義則 (同志社大学教授)・浜治世 (同志社大学教授)	モチベーションと情動	●
59	6	梅本堯夫 (京都大学教授)	思考のメカニズム	●
65	7	多湖輝 (千葉大学教授)・三浦香苗 (千葉大学助教授)	問題解決の方略	●
63	8	二木宏明 (東京大学助教授)・河内十郎 (東京大学助教授)	判断のメカニズム ―大脳皮質連合野のはたらき―	●
58	9	戸田正直 (北海道大学教授)・篠塚寛美 (北海道大学助教授)	ゲームの心理	●
60	10	三隅二不二 (大阪大学教授)	集団の機能	●
62	11	茂木茂八 (神戸女子大学・日本心理適性研究所)	知能の測定	●
61	12	林勝造 (神戸少年鑑別所所長)・一谷彊 (京都教育大学教授)	人格の診断―人間理解の方法と技術―	●
54	13	国分康孝 (東京理科大学教授)	カウンセラーの役割	●

一般心理学編第3部では、図書館検索と文映カタログとで集番が異なっていた。通番は図書館検索での番号順とした。集番、すなわちこの表での掲載順は文映カタログに従った。

現代心理学編 第1部				
66	1	松田隆夫 (徳島大学教授)	人間の情報処理	●
67	2	山岡淳 (日本大学教授)	感覚と感情	●
68	3	岩崎庸男 (筑波大学助教授)・柏瀬宏隆 (防衛大学校講師)	薬物と行動―精神疾患の臨床と基礎―	●
69	4	高橋たまき (日本女子大学教授)	人間の初期経験	●
70	5	原一雄 (国際基督教大学教授)	大脳機能の側性化	●
71	6	杉山貞夫 (関西学院大学教授)	人間工学	●
72	7	田上不二夫 (信州大学)	バイオフィードバック	●
73	8	松山義則 (同志社大学教授)・浜治世 (同志社大学教授)	心の葛藤	●
74	9	本明寛 (早稲田大学教授)	心の投影	●
75	10	橘英弥 (和歌山大学助教授)・三木善彦 (四天王寺国際仏教大学助教授)	カウンセリングと心理療法	●
76	11	竹村研一 (筑波大学助教授)	集団の行動―社会的認知と集団課程―	●
77	12	安倍北夫 (東京外国語大学教授)	異常事態の心理	●
78	13	三隅二不二 (大阪大学教授)	組織のグループダイナミックス	●

通番	集番	指導	タイトル	備考
現代心理学編 第 2 部				
79	1	西川泰夫（上智大学教授）	メンタル・モデル	●
80	2	平井久（上智大学教授）・岡安孝宏（上智大学助手）	ストレスと行動	●
81	3	大塚義孝（京都女子大学教授）	コンプレックス	●
82	4	春木豊（早稲田大学教授）・鈴木晶夫（早稲田大学助手）	ノンバーバル行動	●
83	5	宮本美沙子（日本女子大学教授）・下山剛（東京学芸大学教授）	やる気と原因帰属 / 文映制作・著作	●
84	6	台利夫（筑波大学教授）	心理劇	●
85	7	野口薫（千葉大学教授）	ビジュアル・イリュージョン	●
86	8	千々岩英彰（武蔵野美大教授）	流行の心理	●
87	9	乾正雄（東京工業大学教授）	ヒューマン・スペース	●
88		室伏靖子（京都大学霊長類研究所教授）	チンパンジーの記号行動 / 文映制作・著作	●ビデオ化されず
89	11	鳥居修晃（東京大学教授）・望月登志子（日本女子大学児童研究所）	開眼手術：初めて見る世界	●

通番 14 から 89 の「指導」欄の名前に下線を施した先生は、作品テーマを中心に解説者として登場し、「人物編」のデータベースリストに加えられている。

現代心理学編 第 3 部				
90	1		人間の情報処理：私達の暮らしと情報	●ビデオ版のみ
91	2		社会情報の処理：うわさの社会心理学	●ビデオ版のみ
92	3		記憶情報の処理：保持と忘却の心理学	●ビデオ版のみ
93	4		運転時における情報獲得の重要性	●ビデオ版のみ
94	5		行動のための視覚情報の獲得・処理メカニズム：運転行動を中心として	●ビデオ版のみ
ムーブメント教育				
95	6		第 3 の教育ムーブメント：その理論と治療教育の実践	
96	7		発達診断と指導アセスメントの方法	
97	8		重度障害児の感覚運動	
98	9		精神遅滞児の動き作りと知的発達	
99	10		ムーブメントによる幼児教育	

この表以下のシリーズは、16mm 映画は作成されず、ビデオ版のみが存在する。

基礎学習シリーズ				
100	1		動物学習の実践	●ビデオ版のみ
101	2		情動とモチベーション	●ビデオ版のみ
102	3		リラクセーション	●ビデオ版のみ
103	4		子供の心と身体：水中での運動遊び	●ビデオ版のみ

通番	集番	指導	タイトル	備考
基礎学習シリーズ検査法				
104	5		スクリーニング・テスト	●ビデオ版のみ
105	6		子どもの性格テスト	●ビデオ版のみ
106	7		WISC-R : (検査の実際)	●ビデオ版のみ
107	8		乳児用発達検査	●ビデオ版のみ
108	9		WPPSI : (幼児知能テスト)	●ビデオ版のみ
109	10		ITPA 言語学習能力テスト	●ビデオ版のみ

心の世界				
110	1		聴いていますか？子供の心	
111	2		カウンセラーになるために!!	
112	3		ヒトの知能と思考はどう育つか？	

社会心理学編第1部 人間関係シリーズ				
113	1		社会へのデビュー：対人的コミュニケーションの芽生え	
114	2		親と子のきずな：母へのアタッチメント	
115	3		自分自身との出会い：自己意識の実験社会心理学	
116	4		青年期の人間関係：友情と恋愛	
117	5		対人関係の病理と治療：心理療法あれこれ	●ビデオ版
118	6		社会の中の高齢者	
119	7		きょうだいの序列・その扱いと性格	
120	8		性役割と社会	
121	9		結婚と離婚	
122	10		対人コミュニケーション・会話と適応	

臨床心理学編 第1部 臨床心理学入門シリーズ				
123	1		臨床心理学とは	
124	2		心理アセスメント	
125	3		深層へのアプローチ	
126	4		認知へのアプローチ	
127	5		福祉の領域における臨床心理士	●ビデオ版
128	6		摂食障害と思春期のこころ	
129	7		非行の心理学	
130	8		パーソナリティ・テスト	
131	9		不登校	
132	10		いじめ	

の心理学研究を牽引された先生方の映像から、戦後第一世代の息吹を感じ取ることができる。表1の通番14から89番の「指導」欄の先生方のうち、下線を施した先生について、リストに掲載した。「発達心理学編—幼児期—」については「指導」の先生方のテーマ解説映像がない。また、「発達心理学編—児童期—」に関しては素材収集対象外のシリーズではあるが、「人物編」のみ映像収集の対象に含め、該当する先生は表1に下線を施し、リストに加えた。

3.2 装置・用具編

心理学実験では、その実験のために特別に開発した装置を用いることがある。先進性を求めて、製品化されていない自作装置を用いることも当然だが、多数の研究者や研究室での利用を見込んで製品化されるものも多い。両者を分けてリスト作りを行うことも検討したが、たとえ製品を導入した場合でも、反応箱などを各研究室で自作・工夫している場合も多いため、製品と自作品を分けず、用途に応じて分類することにした。

特徴的な点は、この時代はまだ、心理学実験にコンピュータを用いることは一般的でなく、それぞれの実験には創意工夫した装置類が用いられていた点である。心理学でのコンピュータ利用は、大量データの整理や統計処理のために大型・中型コンピュータをバッチ処理で使うことが中心であった。心理学実験には、ワンボードや日本語の扱えないマイクロコンピュータが、一部の先進的な研究者によって使い始められた時期であった。1980年頃のわが国の心理学のマイクロコンピュータ利用状況については、吉村(1982)の調査データを参照してもらいたい。

心理学実験で用いられていた装置は、心理学実験用に開発されたものばかりでなく、たとえば脳波計など、医学や生理学の基礎研究や臨床利用が中心だったものも少なくない。しかしそれらも、心理学実験に不可欠な装置として使用されていたという事実から、当然ながらリストに加えた。

最初の分類基準として、動物実験に用いられる

装置・用具と、ヒトを実験参加者とする実験に用いられるものに分けた。前者のリストを表2-1に、後者を表2-2に掲げた。

動物実験用の装置は、研究領域で言えば、学習と神経生理に偏る。この時代、心理学の動物実験で最も広く用いられていたのはネズミ類で、作品群からもネズミ類用の装置が最も多く採集された。異なる16mm作品で同じ装置が用いられているという重複もあったが、異なる実験テーマで使われている場合もあったため、すべてをリストに加えることにした。動物実験での機器使用の特徴は、製品として購入したものであっても、それぞれの研究室で加工や追加など改良が加えられている点(業者側からすれば特注品ということになる)である。そこで、リスト掲載に当たっては、装置の類似性でまとめるのではなく、使用している研究室単位、すなわち同じ作品から抜き出したものを隣接させる方針をとった。表中の、装置名のあとに記載されている「通番」が、表1の全作品リストに振られた作品通し番号である。ネズミ類以外では、ニホンザルやチンパンジー実験用の装置が見られ、ネコを用いた実験装置は1件のみ生理実験のものを掲載した。

動物実験に用いられた装置類は、現在でもなおコンピュータに置き換えられない部分が多く、1970年代に使われていた装置類の多くは基本的に現在も使用されている。逆に、動物実験は、実験が長時間に及ぶことが多く実験者が常に監視し続けるににくいこともあり、時間の設定や計測、それに反応数のカウントなどには、当時から実験専用のコンピュータが使われていた。動物実験を行う実験室で広く用いられていた実験制御・反応計測用装置は、米国DEC社のPDP-8とその後継機のPDP-11やUP-600刺激反応自動制御測定記録装置であった。収集した映像にも、それらが写り込んだものが見られる。

ヒトを実験参加者とする実験装置類は、動物実験に比べると多領域に及ぶ。バイオフィードバックなど、当時の新しい研究テーマとして流行していた実験に関する装置は、複数の作品から収集さ

表 2-1. 動物実験で用いられた装置・用具

テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
ネズミ類		
multiple-Y 迷路	4:11	28
スキナー箱	3:17	28
Mowrer=Miller Box	2:43	28
Lashley Jumping Stand	2:36	28
問題解決装置	3:01	28
ラットの受動的回避反応装置	1:51	48
ラットの回避反応装置	1:48	48
ラットの弁別学習装置	0:43	48
ラットの脳神経活動記録装置	3:02	48
ラットの脳内刺激装置	1:19	48
白ネズミの電気ショック装置	4:03	49
UP-600 刺激反応自動制御測定記録装置	3:45	49
白ネズミの弁別反応装置	0:30	52
白ネズミの回避実験装置	2:07	52
ラットのシャトルボックス	2:40	57
ラット用ヘップ＝ウイリアムズ迷路	3:23	57
クライスの弁別装置	1:41	57
ラットのスキナーボックス	3:44	57
ラットの水中迷路	2:24	57
白ネズミの回転カゴ	1:06	64
白ネズミの電気ショックと目標箱	0:51	64
ラットの放射状迷路	3:29	68
ラットのスキナー箱	1:24	68
ラットの電気ショック装置	2:10	68
ラットの脳の摘出手術	3:20	68
ラットのオープンフィールド	2:13	69
ラットの接近－回避装置	0:49	73
ラットの逃避・回避行動の実験装置	3:22	80
ラットの脳内伝達物質の定量分析装置	1:32	80
白ネズミの脳内電極挿入	8:15	38
ヒト以外の霊長類		
サルの遅延反応実験装置と脳神経活動記録	3:01	63
チンパンジー誤反応装置	1:11	88
チンパンジー色名訓練装置	3:07	88

テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
ヒト以外の霊長類（前頁から続き）		
チンパンジー文法理解装置	3:38	88
チンパンジー数の概念装置	1:12	88
ニホンザルの脳波測定	4:49	38
ネコ		
ネコの脳内刺激装置	1:06	48

表 2-2. ヒトの実験で用いられた装置・用具

人間に対する実験	映像時間 M:SS	作品 通番
心理・生理指標		
ポリグラフ	1:33	32
テレメータ・ポリグラフ	1:05	38
ポリグラフ	3:43	46
臭い実験でのポリグラフ測定	2:10	67
携帯用 GSR	0:40	72
PGR ウソ発見器	1:08	81
夢と脳波測定	3:52	74
脳波と半球機能差	1:53	70
誘発電位と加算平均器	1:56	70
バイオ・フィードバック		
心拍のバイオフィードバック装置	2:39	46
脳波のバイオフィードバック	2:09	72
指先脈波による心拍バイオフィードバック	2:19	72
皮膚温のバイオフィードバック装置	2:39	80
条件付け		
眼瞼条件づけ装置	3:23	49
電気ショック装置	0:39	64
二次動因実験装置	1:16	64
手を冷水につける装置	0:52	64
人の電気ショック装置	0:41	64
皮膚電位反応の古典的条件づけと容積脈波の測定	16:27	72
知覚		
Rod-and-Frame Test	0:29	27
ナックのアイカメラ	0:44	40

人間に対する実験	映像時間 M:SS	作品 通番
----------	--------------	----------

知覚（前頁から続き）

ジンスターデンの風車	1:10	51
ネッカーの立方体の影絵回転	2:06	51
エームズの台形	2:35	51
運動奥行き効果	1:12	51
色フィルターによる立体視	2:38	51
クレイク＝オブライエン効果	1:57	55
エームズの部屋	2:13	55
3 視野タキスト	0:36	66
プロジェクタ式タキスト	1:49	70
自作装置での距離知覚の測定	3:39	77
遠近方向の運動知覚の閾値測定	0:53	85
立体運動効果の装置	1:40	85
音声分析器	1:30	73

動作

輪に棒を通す検査 TTK1309c	1:24	29
狙準検査器 TTK1309a および共応検査器 B TTK1309b	1:35	29
運転適性検査装置	0:51	38
イベントレコーダ	5:48	45
ビー玉はめ込み用具	1:08	52
コンフリクト実験装置	1:56	52
筆圧検査器	2:16	29

記憶・思考・コンフリクト

記憶探索実験装置	1:44	44
ストループテスト	2:39	52
積み木パズル	5:25	83

社会心理・ゲーム

ジレンマゲーム装置	4:31	58
対人選択ゲーム装置	2:07	58
対コンピュータゲーム	0:35	58
パニック・シミュレーション装置	3:35	60

その他

低圧実験室	8:04	56
ローテーションルーム	4:20	56
高照度ルーム	3:09	56
CAI	1:17	71

れた。バイオフィードバックとは、一般に意識的にコントロールできないと考えられていた自律神経系の生体反応（たとえば脳波、心拍、皮膚温）を、それらの指標の状態を目や耳で感知できる情報に変換して実験参加者にフィードバックすることで、かなりの程度まで意図的にコントロールができるという新しい研究テーマであった。

筆者の専門研究領域である知覚に関しては、アイ・カメラやタキスト・スコープなど汎用性ある機器が収集された一方、テーマに固有の装置・用具類、すなわちその実験のために作成した特殊な装置・用具類も目立った。ジンスターデンの風車やエームズの台形などのデモンストレーションが含まれ、それらはむしろ、次の「実験のデモンストレーション」に含める方が適切かもしれないが、その装置がなければ実験できないという意味から、「装置・用具類」に含めた。知覚実験は、頭で考えていただけでは、あるいは日常観察だけではだめで、実際にその装置を作って検討しなければならないことが多い。その意味で、知覚研究においては、装置・用具の導入が研究の核心部分を担うことになる。

研究領域として特徴的なのは、社会心理学分野の実験装置がかなり見られた点である。現在でも、現場研究や調査研究ではなく、実験室実験により研究を進めている「実験社会心理学」という領域があるが、当時の社会心理学では実験室実験がより一般的であった。しかも当時は、大がかりでかなり高価な装置を導入した実験も行われていた。もちろん、どこの社会心理研究室でも導入できたわけではない。専用の装置をもっていることが、そのテーマの研究に特権的に携われる立場を与えた。

このことは、社会心理学の分野に限られることでなく、大規模な研究費や研究スペース、それに研究を担うスタッフの確保を実現できた研究室が、あるテーマの研究を独占的に行うという実態があった。研究が競争である以上、それは当然かもしれない。各大学の心理学研究室は、ある領域の研究のために装置やスペース、研究費を集中的に

投入していたわけなので、見方を変えれば、それぞれの研究室には特徴があり、「…の研究と言えば、どこそこの研究室」という個性をもっていた。現在は、「誰それと言えば、何々の研究」という研究者個人が個性を担っている。

装置・施設がなければ研究できないという実態の極みは、「その他」に掲載した名古屋大学環境医学研究所にあった「低圧実験室」などであろう。これは、同研究所第六部門の荻阪良二先生が「指導」した『環境心理学』に登場する施設だが、宇宙開発を視野に入れた医学領域の研究所ならではの可能な大規模設備であった。エベレスト登山などの低圧状況にあって思考力や適切な判断がどのように制限されるかという心理学的テーマの研究も取り入れられていた。このテーマに興味をもった学生や研究者が名古屋以外の地に現れても、おいそれと研究を実現することはできない。

ここまで特殊な設備になると、所属する研究者による装置の独占よりも、共同研究施設としての開放が指向される。表 21 に記載した霊長類を用いる研究も、平生の飼育・管理まで含めると、きわめて限られた研究施設でなければ実現できない。特に、チンパンジーを研究協力者とする研究は、表にも収録した京都大学霊長類研究所への一極集中とならざるを得ない。当時から、この研究施設では共同研究を公募するなど、研究施設を独占しない姿勢が展開されてきた。筆者自身も 1982 年に霊長類研究所の共同研究員として、1 歳のニホンザルに逆さめがねを数日着用してもらうという知覚順応実験を行わせてもらった。また、名古屋大学環境医学研究所でも、眼球運動を測定するための研究セミナーなど、1970 年代後半の同研究室からさまざまな研究上の刺激を受けた。

収集映像には、当時頻繁に用いられていた装置・用具類なのに登場しないものもあった。指導に当たられた先生が、どこの研究室にもあるものではなく、ご自身の研究室ご自慢の装置類や創意工夫した用具類を取り上げる傾向があったためであろう。

3.3 実験・検査のデモンストレーション

3つのカテゴリーのうち、このカテゴリーの素材が最も多く収集できた。リスト化に当たっては、動物とヒトに対する実験を分けなかったが、ヒト以外の動物実験のデモンストレーションには、どの動物を用いたものかを、表3のそれぞれのテーマに書き添えた。動物名が付されていないものは、ヒトを対象とする実験やテストであることを意味する。リスト作成に当たり配慮した点や問題点を、以下に列挙する。

- (1) テーマの命名の中には、その研究領域の専門家が命名すれば内容をよりの確に表現できるものも少なくないが、ここでは映画において示された研究テーマ名をそのまま用いることを原則とした。
- (2) 作品によっては、『心理劇』など、作品全体で1つのテーマのデモンストレーションを行っているものもある。本リストでは、実験や検査の様子をコンパクトにデモンストレーションすることを心がけたため、長いデモンストレーションはリストから外した。
- (3) 映像で示されている実験は、あくまでデモンストレーションであって、実際の実験場面とは異なるものが多い。たとえば、撮影に都合よい配置に変更したり、本来は暗室で行うべきものを明室状況に変えたものもある。それでも、実際の患者さんなどをお願いして障がいを抱えた人の実際の様子を捉えた映像など記録的価値のあるものも収集された。
- (4) 「人物編」では収集できなかったが、実験や検査の実施者として映像に登場する先生方の映像もかなり含まれている。その意味で、「人物編」のコンテンツを補うものにもなっている。
- (5) 「装置・用具編」と重複するものもある。また、装置・用具とまでは言えないが、使用するカードや材料など、実験や検査を行うに当たって必要なものを映し出した箇所も収集するように心がけた。

収集できた素材を数量的にバランスよく分類す

ることを目指し、「学習・行動」「情動・フラストレーション」「生理」「記憶・思考・認知」「知覚」「社会」「検査・テスト・観察」「臨床」「障がい」に分けた。すなわち、あらかじめ定めた分類カテゴリーに当てはめたのではなく、結果としてこのような分類になったのである。それでも、数の上で、「記憶・思考・認知」に属する項目が多かった。これは、記憶・思考・認知の3領域の境界が現在以上に明確でないため3領域を含めざるを得ず、「認知心理学」という今日の研究領域が1970年代にかなりの比重を占めるまでに成長していたことによる。戦後第一世代の先生方の研究は、行動主義に基づく「学習・行動」領域の研究と、新しい潮流である「認知」に関する研究のせめぎ合いの中にあったことが、表3の映像素材の分布からも裏づけられる。

おわりに

本研究では、“時代”区分ではなく、心理学研究を担ってきた研究者達の“世代”で歴史を特徴づけるといふ、何とも境界線が不明瞭な区分の上に立つ議論を展開した。そうすることが、本稿で主張したい論点を浮かび上がらせることになると考えたからである。また、戦後第一世代を担われた先生方は、今なおご存命の方も少なくない。その意味で、歴史的人物として論じることは尚早と考えるべきであろう。それにもかかわらず、“戦後第一世代”というくくりを提示したのは、現在およびこれからの日本の心理学研究・教育を見つめるには、この世代がどのような活動期であったかの理解を踏まえることが不可欠と考えたからである。筆者の世代は、戦後第一世代の先生方をモデルにして研究の意義や方向性を得てきた。すなわち、戦後第一世代のコピーを目指した。しかし、次の世代である現在の心理学を担う研究者達は、コピーのコピーでは立ちゆかない。過去を見据え、現在と将来を方向づけていかなければならない。「過去を見据える」という作業の中で、戦後第一世代を歴史的により正確に捉えるため、生き証人が

表 3. 実験や検査のデモンストレーション

領域	テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
学習・行動			
	ラットの接近－回避コンフリクト	0:49	73
	Learned Helplessness	1:48	80
	ラットのオープンフィールドでの探索行動	2:13	69
	眼瞼条件づけ	3:23	49
	白ネズミの条件性情動反応	4:03	49
	皮膚電位反射の古典的条件づけ	16:27	72
	白ネズミのオペラント条件づけ	3:45	49
	自律反応によるオペラント条件づけ	1:32	49
	ラットの受動的回避反応の習得	1:51	48
	薬物投与によるラットの回避反応忘却	1:48	48
	ラットの弁別学習と薬物投与の効果	0:43	48
	技能習得（タイプライター）	3:44	53
	ラットの遺伝系統と回避学習	2:40	57
	ラットの初期経験	3:23	57
	強化の遅延	1:41	57
	ラットの強化スケジュール	3:44	57
	ラットの動機づけと課題困難度の関係	2:24	57
	サルの前延反応実験	3:01	63
	白ネズミの迷路学習	4:50	28
	白ネズミのテコ押し学習	3:17	28
	白ネズミの回避学習	2:43	28
	白ネズミの弁別学習	2:36	28
	白ネズミの問題解決学習	3:01	28
	筆圧検査	2:16	29
情動・フラストレーション			
	フラストレーション実験（妨害型）	1:08	52
	白ネズミの弁別反応のフラストレーション	0:30	52
	接近－接近型コンフリクト実験	1:56	52
	白ネズミの電気ショック回避実験（胃の剖検）	2:07	52
	不安と課題の難易度	4:11	64
	怒りと性的動因	3:12	64
生理			
	REM と夢	3:51	74
	脳波を用いた半球機能差実験	1:53	70

領域	テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
----	-----	--------------	----------

生理（前頁から続き）

誘発電位の加算平均	1:56	70
脳波測定実験	1:49	59
皮膚温のバイオフィードバック	2:39	80
心拍のバイオフィードバック	2:39	46
皮膚温のバイオフィードバック	1:47	52
脳波のバイオフィードバック	2:09	72
心拍のバイオフィードバック	2:19	72
ラットのトリアティック・デザイン	3:22	80
ラットの脳内伝達物質の定量分析	1:32	80
ラットの脳内自己刺激と脳解剖	1:19	48
ネコの怒り反応の脳内刺激による誘発	1:06	48
ラットに覚醒剤注入	3:29	68
ラットの鬱実験	1:24	68
ラットに抗不安薬投与	2:10	68
ラットの投薬による攻撃行動	3:20	68

記憶・思考・認知

チンパンジーの文法理解	3:38	88
チンパンジーの数概念	1:12	88
チンパンジーの見本合わせ	3:18	88
ニワトリ・イヌの回り道行動	1:31	30
チンパンジーの棒の利用	1:18	30
チンパンジーの箱の利用	4:07	30
チンパンジーと人の記憶実験	1:57	30
チンパンジーと人の問題箱	3:04	30
アナグラム課題	2:36	80
図形認知	1:34	79
メンタルマップ描出法	3:41	79
メンタル・ローテーション	2:30	79
イメージ化による文章理解	3:25	79
記憶術のデモ	2:49	40
想起の実験	1:44	44
概念学習実験	2:25	43
概念検査法	1:18	43
数の保存の検査	1:35	43
ストループ・テスト	2:39	52

領域	テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
----	-----	--------------	----------

記憶・思考・認知（前頁から続き）

小学生の問題解決実験	2:09	65
大学生の将棋の逆転発想問題	2:47	65
マッチ棒での形の作成	1:03	59
文字と数字の重ね合わせ問題	1:22	59
イメージと眼球運動	1:07	59
外言・口元の筋電測定	1:05	59
ハノイの塔	1:27	59
人とオバケの川渡り	2:57	59
ブレーン・ストーミング	2:46	65
Dunker の箱問題	5:30	34
概念学習	2:57	34
子どもの空間概念	6:15	34
子どもの推移率理解（非言語性）	2:19	34

知覚

両耳分離聴・半球機能差	1:42	70
スリット視	0:48	66
視覚マスキング	1:50	66
空腹時と満腹時の距離認知	3:39	77
黄金分割（一対比較法）	1:19	67
チンパンジーの色名訓練	3:07	88
大円・中円・小円の回転運動	1:59	41
サイクロイド	1:45	41
バイオロジカル・モーション	0:52	41
速さ知覚の相対性	0:43	41
棒の形と斜線の運動方向	1:12	41
混色実験	1:05	55
色順応実験	0:54	55
色と明るさの対比実験	1:09	55
クレイク・オブライエン効果	1:57	55
エームズの部屋	2:13	55
貨幣の大きさ知覚	0:53	27
RFT	0:29	27
ミューラーリヤー錯視	2:10	39
重さの対比錯視	2:09	39
重さの弁別閾	2:09	39

領域	テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
----	-----	--------------	----------

社会

ラットのパニック実験	1:36	77
小学生による避難（パニック）実験	0:40	77
パニックゲーム（戦車の脱出）	2:26	77
ミンツのコンフリクト実験	2:02	73
パニック実験	3:35	60
ジレンマ・ゲーム	4:31	58
3人対人選択ゲーム	2:07	58
取引ゲーム	1:51	58
対コンピュータ・ゲーム	0:35	58
モデリング実験	2:49	46
ミシヨット式愛情・攻撃シミュレーション	1:55	64
原因帰属実験	5:25	83
パーソナル・スペース実験	0:54	82
レヴィンに始まる集団討議	5:24	50

検査・テスト・観察

EPPSの実施	1:15	74
TATの実施	2:13	74
言語連想検査	2:32	81
PGR ウソ発見器を使った言語連想検査	1:08	81
ソンディ・テスト	1:26	81
HTPの実施	2:52	74
行動観察法の実際	3:59	45
実験室での統制観察法	5:48	45
知的側面の検査（グラッシー法）	0:39	61
フィンガー（ボディ）ペインティング	1:40	74

臨床

カウンセリングのデモ	0:52	75
内観療法のデモ	5:34	75
鬱病面接	1:07	68
クライアントの音声分析	1:30	73
系統的脱感作法	3:43	46
強化療法	2:39	46
学生相談の実施	8:04	83
催眠暗示	8:17	32

領域	テーマ	映像時間 M:SS	作品 通番
臨床（前頁から続き）			
	催眠夢	2:52	32
	催眠性年齢退行	2:27	32
	催眠性痛覚	1:33	32
	後催眠行動	2:03	32

障がい

	脳損傷患者のテスト	2:10	70
	失語症者の検査	3:44	40
	運動性失語症検査	3:24	63
	感覚性失語症検査	3:11	63
	左半側視空間失認症	2:43	63
	開眼手術者の実体物の二次元表示	2:19	89
	開眼手術者の手術後インタビュー	2:36	89
	開眼手術回復の順序性と訓練	13:43	89
	先天盲の開眼手術後の知覚	3:49	69

動物実験の場合は、テーマに被験体動物名を付した。動物名が付されていないものは、ヒトを対象とするものである。

得られる今のうちにやっておくべきことがあるはずである。誰から何を聞き出しておくべきか。本稿がそうしたことへの指針の一つになることを願う次第である。

筆者が本企画に取り組もうとした動機は、立教大学長田佳久教授を代表者とする科学研究費の補助を受けた「心理学の古典的実験機器に関するデータベース作成とその活用」（基盤研究B）に研究分担者として参加したことにある。筆者なりにどのような貢献ができるかを考えたとき、法政大学文学部心理学科がほぼ全巻所有していた文映教育映画社製作の16mm映画「心理学シリーズ」の活用を思いついた。今となつては、教育現場で学生に丸ごと視聴させるには、内容も作り方も古びている。しかし、日本の心理学研究・教育のあり方を歴史的観点から見通そうとすると、「心理学シリーズ」はこの上ない教材になり得ると考えた。そもそも、1巻購入するだけでも高価だった当時の16mm映画を、法政大学文学部が百本近く購入

していたことには、当時の担当教員の並々ならぬ思い入れがあったと推察される。法政大学文学部心理学科は、2003年4月に創設された若い学科で、それまで終戦後の昼間部では教養課程の心理学が中心であった。法政大学の場合、大量の16mm映画の購入には、おそらく乾孝先生が関わっていたと思われる。乾先生は、戦前、城戸幡太郎のもと法政大学で心理学を学び、終戦直後から1982年までの長きにわたり法政大学で教鞭を執り、教養課程の心理学を担当していた。定年退職後には、「知覚」や「性格」などのビデオ教材作品を自ら作成するなど、映像による心理学教育に熱意を傾けられた。「紙ではなくビデオというメディアで書いた論文」という趣旨の発言をされていたとのことである（吉村・近藤, 2005）。また、本研究で扱った文映の心理学シリーズとは異なるが、監修法政大学教授乾孝『児童心理シリーズ未来がいっぱい—乳児期—』（指導保育問題研究会天野章）や『児童心理シリーズ ひとりだち—1, 2才児—』（指導

保育問題研究会天野章・愛育研究所星美智子）（ともに教育映画配給社配給，日本映像株式会社作品，16mm・モノクロ18分）を監修しておられる。乾先生は，年代的にはまさしく戦後第一世代に属する。戦後まもなくから続く古い研究室ならどこの研究室にも，戦後第一世代の先生方の研究への思い入れを今に伝える何かが残されているはずである。それを捉えるには，探そうとする意志と探すための視点を必要とする。本稿で紹介した全国さまざまな大学の戦後第一世代の先生方の当時の一コマが，われわれと次の世代の立ち位置を捉える機会になることを期待して，本稿を終えたい。

参考文献

- 溝口元（2006）日米研究助成財団と心理学—カーネギー財団，ロックフェラー財団，斎藤報恩会の場合— 心理学史・心理学論，**7/8**，1-14.
- 日本心理学会 75 周年史編集委員会編（2002）日本心理学会 75 年史 日本心理学会
- 西川泰夫（2005）日本心理学会の変遷を通じて見た心理学の位置 西川泰夫・高砂美樹（編）心理学史 放送大学教育振興会 pp.186-207.
- 西川泰夫（2010）日本における心理学の広がり 西川泰夫・高砂美樹（編）改訂版心理学史 放送大学教育振興会 pp.99-104.
- 吉村浩一（1982）我が国の「心理学におけるマイクロコンピュータ利用状況」についての調査結果から 人文（京都大学教養部），**27**，1-27.
- 吉村浩一（2004）歴史なき心理学科で歴史を想う—城戸幡太郎と矢田部達郎— 法政大学文学部紀要，**49**，75-97.
- 吉村浩一・近藤智嗣，（2005）乾孝が目指した映像論文「心理学」—ビデオ作品『知覚』を中心に— 法政大学文学部紀要，**50**，63-86.

The First Generation of Japanese Psychology Researchers after World War II: An Investigation based on Film Archives

YOSHIMURA Hirokazu

The psychological laboratory of Hosei university has almost all titles of 16mm film library of the psychology education released from Bunei Kyoiku Eiga-sha between about 1970 and 1985. Not small members of the first generation psychology researchers in Japan after the World War II participated in making the film library. I checked the whole films and pick out a lot of valuable scenes from the historical point of view. Based on the collected clips, I built a database which was composed of three sections; Researchers, Apparatus, and Demonstrations of experiments and psychological tests. It will provide a chance to look back over the works of the first generation and to consider the presence and the near future of the psychological research for the Japanese younger generation.